

使徒の働き8章26－40節 「一人の人への伝道」

1A 主の使いからの指示 26－28

2A 御霊による命令 29－30

3A 預言者による証言 31－35

4A 水のパプテスマ 36－39

5A 伝道者ピリポ 40

本文

使徒の働き 8 章を開いてください。私たちの学びは、ピリポのサマリアにおける宣教の働きについて前回見ました。25 節まで読みました。今晚は、26 節から見ます。サマリアで、数多くの人が主イエスを信じ、パプテスマを受け、また聖霊のパプテスマも受けている姿を見ました。ところが、26 節からは、その現場から主の指示によって、全く何もない所に連れていかれ、そこでたった一人の人のために伝道するように導かれます。ここにある、とても大切な宣教の働きについて、見ていきたいと思います。

1A 主の使いからの指示 26－28

²⁶ さて、主の使いがピリポに言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」そこは荒野である。

主の使いが、ピリポのところに来ました。これまでも、牢に入れられた使徒たちを、主の使いが、牢の戸を開けて連れ出し、宮で、いのちのことばを全て語りなさいと命じているところがあります(5:19-20)。

この、主の使いですが、預言者エリヤに対する主の使いの指示と似ています。「Ⅱ列王 1:3-4 そのころ、【主】の使いがティシュベ人エリヤに告げた。「さあ、上って行って、サマリアの王の使者たちに会い、彼らにこう言え。『あなたがたがエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てに行くのは、イスラエルに神がいないためか。4 それゆえ、【主】はこう言われる。あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」そこでエリヤは出て行った。」サマリアとは全然、違うところにいたエリヤに対して、イスラエルの王自身に神のことばを告げるために、出ていきなさいと命じています。ピリポは今、サマリアにいますが、ガザに下る道に出なさいと、違うところに行くように指示されています。

旧約時代では、主の使いは、しばしば主ご自身と同一になった存在として、現れます。数ある御使いの中でも、主ご自身から来られた方として現れます。多くの聖書学者が、旧約時代は受肉前

のキリストの御姿だとしますが、その特定は横においても、主ご自身がはっきりとピリポに指示を与えているのだということが、はっきりわかります。

ここでルカが、エルサレムからガザへの道が「そこは荒野である」と注釈を入れているのは、興味深いです。つまり、何もないところだということです。しかも、とても遠いです。グーグルマップで単純に計算しても、140 ㎞あると出てきました。数々の人が、主イエスを信じて、バプテスマを受け、それから使徒ペテロやヨハネがやってきて、手を置いたら聖霊を受けているのです。そのすばらしい喜びが湧いているところから離れて、全然、違うところになぜ行くのか？ということですね。

しかし、今晚の学びにおいて、ここがテーマになると思います。どんなにすばらしい主のみわざがあったとしても、主が命じられるのであれば、たった一人の、しかも何もないうなところに行けと言われたとしても、導きに従順になるということです。

カルバリーチャペルが、実はそうやって始まりました。チャック・スミスは、フォー・スクウェアという教団で、長いこと牧会をしていました。教会もいろいろと変わっていききました。なかなか人が集まらない中で、コロナという町での教会はとても祝福され、人も増えて行ったそうです。ところが、コスタメサにある「カルバリーチャペル」という教会は、20 名ぐらいしかいなかったのでしょうか、牧師を招聘できなければ、教会を閉じるつもりだったのだそうです。チャックは祈りました、それで、その教会の牧会を始めたのです。一番、苦しんだのは奥さんのケイさんです。共に苦しい牧会と同伴しました。ようやく実が結ばれてきたのに、どうして何もないところに行くの？と思いました。なんと、チャックがおかしくなったのだらうと思って、知り合いの精神カウンセラーに彼を見てもらうことまでしたのです。ところが、ある時に、チャックが家に戻ってきたら、ケイが出てきて、泣きじゃくっていました。それは、「主に、夫に従いなさい」と言われたとのことでした。

そうです、その小さなカルバリーチャペルという教会が、全米でヒッピーという若者を中心とする、ジーザス・ムーブメントの中心に用いられるようになります。まさに箴言に書かれている勧めですね、「3:5 心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。」

ところで、「ガザ」という地名が出てきましたが、今、話題のあのガザです。聖書では、ペリシテ人の五つの町の一つとして出てきます。ペリシテ人の町としては、ギリシア時代になくなります。けれども、ギリシア・ローマ時代にも町としては生き続け、ビザンチンの教会の時代にも栄えます。実は、ガザでの遺跡の発掘は発達してしまっていて、いろいろな発見があります。

そしてガザは、南、エジプトやアフリカに行く道でもありました。ペリシテの平野にある海岸の町ですが、南に下ればシナイ半島に入り、シュルの荒野という沙漠の地域になります。その向こうがアフリカです。まず、エジプトに行き、その向こうに、これから出てくるエチオピアなどがあります。

「ウィア・マリス」、すなわち「海沿いの道」と呼ばれる、メソポタミアとアフリカをつなぐ、国際幹線道路の分岐点の一つがガザです。

²⁷ そこで、ピリポは立って出かけた。すると見よ。そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、
²⁸ 帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。

ピリポが従順になって立って出かけると、「**すると見よ。**」とルカは記しています。彼が伝道することにある、エチオピア人の宦官がその道を通して、馬車に乗っていました。このように信仰によって一歩踏み出すと、次の道を示されます。

そして、「**エチオピア人**」が出てきました。エチオピアは、聖書的にも、歴史的にも、とても重要なところなのですが、見逃されています。古代名が「クシュ」です。ただ、当時のクシュはエジプト南部からスーダンに広がる王国で、今のエチオピアに限りません。聖書には数多く、クシュの名が出てきます。

かつてイザヤ書を学んだ時、クシュに対する預言が、エジプトに対する預言の前にあったのを読みました。その預言の最後に、とても興味深いことが書かれています。「18:7 そのとき、背が高く肌の滑らかな民、あちこちで恐れられている民、その国土を多くの川が分けている、力強い踏みじける国民から、万軍の【主】の名のある場所、シオンの山へ、万軍の【主】のために贈り物が運ばれて来る。」これは、ヒゼキヤ王の時に、エルサレムを主がアッシリアの包囲から解放された時、周囲の国々から贈り物が持って来られたことで成就したと考えられます。しかし、これは将来にも、イスラエルに対して周囲の国々が、その王、キリストに贈り物を持ってくるという所で、究極的に成就するのではないかと思います。

そして、これから見ていく、エチオピアの宦官が主を礼拝にしにエルサレムまで来て、しかも主イエスを信じるということは、その魂自体が、何にも代えがたい贈り物ではないでしょうか？この宦官の回心によって、実に、古代からエチオピアには教会が建てられていきました。私たちの知っている、ギリシア正教会、そしてローマ・カトリックという歴史から、全く離れて、独自にその伝統が守られてきました。今も、エチオピア正教会として存続しています。私たちが聖地旅行に行った時も、ヨルダン川の洗礼場で、数多くの、エチオピアから来たであろう方々にお会いしました。

エチオピアのエルサレムとのつながりは、言い伝えではありますが、はるかソロモンの時代にさかのぼります。シェバの女王がソロモン王を謁見しましたが、「**シェバの女王が求めたものは何でもその望みのままに与えた。(I 列王 10:13)**」とありますが、その望みの一つがソロモンの子孫を作るということです。シェバ女王が妊娠して、ソロモンの子が生まれ、それで我々がその子孫であ

るとして、エチオピア系ユダヤ人がいます。この宦官は、そのような人の一人であったかもしれません。今でも、イスラエルにはエチオピア系ユダヤ人が多くいます。

ですから、ユダヤ教にも、またキリスト教にも、エチオピアの国は深いつながりを持っています。そして聖書にも出てくる国なのです。けれども、遠い僻地のようにして、人目から離れているというのも事実です。そうした人に、主は福音をもって届こうとしています。

そして彼は「宦官」です。律法にはっきりと、「申 23:1 辜丸のつぶれた者、陰茎を切り取られた者は【主】の集会に加わってはならない。」とあります。ですから、彼は、第一に、エチオピア人であり、また異邦人でもあり、それだけで神殿の礼拝から外されている人です。けれども、彼はユダヤ教に改宗しています。だから行けそうなものですが、第二に、宦官なので入れないのです。したがって、彼はエルサレムで神殿の敷地に行っても、「異邦人の庭」のところまでは入れても、それ以上、「婦人の庭」など、内部には入れませんでした。神殿の敷地には、「これ以上踏み入れたら、死の責任を負う」という内容の標識があったぐらいです。ですから、彼は、イスラエルの神を求めながらも、しかし、イスラエルの仲間から引き離されていたという思いを強くしていたに違いありません。

しかし、イザヤは、終わりの日の預言として、異邦人も、また宦官も、主の家に来て祈ることのできる恵みを預言しています。ルカは、使徒の働きの中に、次のイザヤの預言を強く意識して、この大事な出来事を書き記しているのだと思います。56 章 3-6 節です。

3 【主】に連なる異国の民は言ってはならない。「【主】はきっと、私をその民から切り離される」と。宦官も言ってはならない。「ああ、私は枯れ木だ」と。4 なぜなら、【主】がこう言われるからだ。「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶことを選び、わたしの契約を堅く保つ宦官たちには、5 わたしの家、わたしの城壁の中で、息子、娘にもまさる記念の名を与え、絶えることのない永遠の名を与える。

6 また、【主】に連なって主に仕え、【主】の名を愛して、そのしもべとなった異国の民が、みな安息日を守ってこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、7 わたしの聖なる山に来させて、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のささげ物やいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。なぜならわたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ。

そして、馬車に乗って、「預言者イザヤの書を読んでいた」とあります。まず、巻き物はとても貴重なもので、普通の人は手にすることはできません。けれども、彼が持っていたというのは、やはり女王の側近という高い地位にいたからではないかと考えられます。そして、ピリポが、イザヤ書を彼が読んでいたのが分かったのですが、それは、彼が声に出して読んでいるからです。ユダヤ人

がみことばを読む時は、必ず声に出します。

2A 御霊による命令 29－30

²⁹ 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車と一緒に行きなさい」と言われた。³⁰ そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが分かりますか」と言った。

ピリポに対して、主の使いが命じて、彼はここまで来ましたが、今度は御霊ご自身が、エチオピア人の宦官のところと一緒に行きなさいと命じられます。ピリポは、ここでも従順でした。主の導きは、このように一歩、一歩です。ずっと先まで見せるのではなく、次の一歩を見せて、それをふんでいくと、次の一歩を見せてくださいます。

そして、ピリポは声をかけていますね。これは、彼の思いっきりが必要でした。誰かのところに伝道のために行ったのに、いざ、その場にいると、なんと話しかけなかったということは十分あります。けれども、話しかけてみることで初めて、伝えることができます。

イエスがサマリアを通られた時に、スカルのところにある井戸のかたわらに座り、水を汲みにやってきた女に話しかけました。「ヨハネ 4:7 わたしに水を飲ませてください。」と言われたのです。とても簡単な一言ですが、実はとても難しい一言でした。ユダヤ人の男性が、サマリア人の女性に話しかけるのはまずありえません。それで女もなぜサマリアの女の私に飲み水を求めるのか？と逆に聞いています。このように、怪訝な反応をされることは十分にありえます。だから語りかけるのが難しい。けれども、御霊による促し、その導きに思い切って従うことが必要です。

そして、「あなたは、読んでいることが分かりますか」と言っていますね。質問するのは、とってもよいことです。相手の土俵で伝道することです。一対一の場合は特に、一方的に語るのではなく、その人が求めていること、悩んでいること、疑問に抱いている事に寄り添うのです。そこから、イエスを紹介することができます。

3A 預言者による証言 31－35

³¹ するとその人は、「導いてくれる人がいなければ、どうして分かるでしょうか」と答えた。そして、馬車に乗って一緒に座るよう、ピリポに頼んだ。

読んでいても分からない。導いてくれる人が必要だと、素直にピリポにお願いしています。これが、伝道者の働きと賜物です。また、聖書教師の働きと賜物でもあります。読んでいるだけではわからないことがあります。聖霊によって、説き明かしが与えられますが、その賜物が与えられている人々がいます。また、それぞれが、説き明かしのための力を聖霊によって与えられることもできま

す。私たちは今、Inductive Bible Study(帰納的聖書の学び)を教会で行っていますが、まさに、このことが目的です。書かれていることをそのまま受け入れ、聖霊によって説き明かしと、私たちへの適用を求めるのです。

³² 彼が読んでいた聖書の箇所には、こうあった。「屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている子羊のように、彼は口を開かない。³³ 彼は卑しめられ、さばきは行われなかった。彼の時代のことを、だれが語れるだろう。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」

まさにここは、イザヤの預言、いや聖書全体を見ても、罪の身代わりとして、人々のために死なれるメシアの預言です。ここまで、明らかにされているところはありません。53 章です。

³⁴ 宦官はピリポに向かって言った。「お尋ねしますが、預言者はだれについてこう言っているのですか。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」

これは、自分、すなわちイザヤについてのことでしょうか？それとも、他のだれかについてでしょうか？という意味です。現代のユダヤ教では、ここの「彼」は、イスラエルの民自身のことだと言っています。でも、読み進めたら、全く整合性が取れません。イスラエルの民が、イスラエルの民の咎のために、屠られた子羊のようになるというようになってしまうからです。

³⁵ ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた。

そうです、ここの彼は、明らかにイエス・キリストのことです。そして、ここのイザヤの預言ですが、「屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている子羊のように、彼は口を開かない。」というのは、主がユダヤ人の指導者たちに訴えられているのに、一切お答えにならなかったところで成就しています。「マタ 27:12-14 しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えにならなかった。そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。」それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。」そして、「彼は卑しめられ、さばきは行われなかった」という言葉は、主に罪がないと総督ピラトは分かっていたのに、それでも十字架刑に処したというところで、実現しました。そして、「彼の時代のことを、だれが語れるだろう。彼のいのちは地上から取り去られたのである」とありますが、衝撃的なことですが、これがイエスにあって実現したのです。

エチオピアの宦官は、この出来事はそれほど前のことではないですから、彼自身ももしかしたら、過越の祭りに参加していたかもしれず、知らなかったことではなかったかと思います。ですから、イエスが、この、屠られた子羊なのだということに確信を持てたのでしょう。

このようにして、ピリポは「イエスの福音」を宣べ伝えました。他にも、話そうと思えばいくらでも話せたでしょうが、彼はこの一点に集中していました。パウロはこう言いました、「Ⅱコリ 4:5 私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。」

主ご自身が、サマリアの女に話しかけられた時も同じです。目の前にある井戸から、ご自分にいのちの水がある、永遠のいのちがあることを伝えられました。女は、サマリア人とユダヤ人の確執についての話題を取り上げましたが、イエスはその度に、御霊とまことをもって神を礼拝する時が来るとして、ご自身がメシアなのだということを、女が知ることができるようにしました。他にもいろいろなことを話せたでしょうが、主は、ご自分のことを伝えること以外はしませんでした。

これが、伝道の秘訣です。私たちは、相手の求めていることに寄り添います。そして、そこからイエスを語ります。そして、イエスを宣べ伝えること以外に話がそれることなく、一点に集中します。

4A 水のパプテスマ 36－39

³⁶ 道を進んで行くうちに、水のある場所に來たので、宦官は言った。「見てください。水があります。私がパプテスマを受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」

次が 38 節に飛んでいて、37 節がないですが、新改訳は下の引照のところにあります。「そこでピリポは言った、『もしあなたが心底から信じるならば、よいのです。』すると彼は答えて言った。『私は、イエス・キリストが神の御子であることを信じます。』」

そう、この信仰の告白によって、彼はパプテスマを受けるに値しました。ピリポは、イエス様が語られた、「マル 16:16 信じてパプテスマを受ける者は救われます。信じない者は罪に定められます。」ということも、語ったのだと思います。信じるということは、行動に移すことです。知的に信条に同意することだけでなく、イエスという方に全き信頼を寄せ、自分自身をゆだねることです。この方の死とよみがえりに自分を一体化させることです。ですから、信じて、その信じたことを目で見える形で表すために、パプテスマを受けます。

大事なのは、パプテスマを受けることが信じているという事実だけで行動に移していることです。私たちは新しい信者の学びをしていますが、それを行ったら初めてパプテスマを受けられるということではありません。信じてパプテスマを受けるのです。これだけ単純なのです。簡単だという意味ではありません。大きな決断で、人にはプライドがありますから、その一歩を踏むのをためらいます。けれども、信じる時にはそのまま行動に移すのです。この単純性を濁らせてはいけません。

³⁸ そして、馬車を止めるように命じた。ピリポと宦官は二人とも水の中に降りて行き、ピリポが宦官

にバプテスマを受けた。

「水の中に降りて行き」とあります。穴の深いところに、もしかしたら地下水が流れていたのかもしれない。いずれにしても、水の中に入るのです。バプテスマには、滴礼というものはありませんでした。頭に数滴振りかけて、それを洗礼と呼ぶことがあります。聖書ではすべてが浸礼です。全身が浸かるものです。

³⁹ 二人が水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られた。宦官はもはやピリポを見ることはなかったが、喜びながら帰って行った。

ピリポが、御霊によって連れ去られました！これは、第一テサロニケ 4 章の、天に引き上げられる時と同じ言葉になっています。携挙の時は上ですが、ここでは水平に違うところに連れ去られました。このような御霊の働きは、初めてではなく、例えば、預言者エゼキエルが、離散の地バビロンにいたのに、エルサレムに運ばれて、その神殿で人々が偶像を拝んでいる姿を見させられました。そしてまた、離散の地に御霊によって戻ってきます。

しかし、宦官は喜びました。福音は、人々に救いの喜びを与えます。そして、疎外されていた異邦人、そして宦官である彼が、イエスの御名によって、神に近づけられたのです。非常に大きな喜びです。私たちは、神からも、神についてのものからも、遠くにいても感じていても、いいえ、イエス・キリストによって近づけられたのです。

そして、この出来事は、少し、イエスがデカポリス地方で行われたことに似ています。ガリラヤ湖の東、ゲラサ人の住むところとして福音書では紹介されています。そこは、異邦人の多く住む地域で、デカポリスと呼ばれる地方の一部です。レギオンに憑かれていた男から、悪霊を追い出されました。その後のことです、マルコ 5 章にこう書かれています。「マル 5:18-20 イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人がお供させてほしいとイエスに願った。19 しかし、イエスはお許しにならず、彼にこう言われた。「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい。そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい。」20 それで彼は立ち去り、イエスが自分にどれほど大きなことをしてくださったかを、デカポリス地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた。」イエスはお供させませんでした。それは、イエスは他にイスラエルのために宣教の働きをしなければいけない時でした。しかし、異邦人への宣教も心に秘めておられました。それで、この男に託したのです。

それと似たようなことを、主はピリポに任せておられたのでしょう。エチオピアへの宣教を、この宦官に任せられたのでしょう。それで、エチオピアには早くから教会が建てられ、長い歴史の中で今にまで至るのです。こうやって、主は、たった一人に伝えても、それはその後の多くの人々に伝

えるために用いられるという、ご計画があります。

5A 伝道者ピリポ 40

⁴⁰ それからピリポはアゾトに現れた。そして、すべての町を通して福音を宣べ伝え、カイサリアに行った。

御霊によって、ガザへの道からアゾトに移されました。アゾトは旧約時代のアシュドデです。今のイスラエルは、そのまま古代の町の名前、アシュドデを使って住んでいます。30 ㎞そのまま海岸沿いに北に行くとアゾトに着きます。そして、そこからさらに北上します。グーグルで単純に計算すると、カイサリアまでは 98 ㎞、徒歩で 20 時間ぐらいかかるところです。すべての町を通して福音を宣べ伝えながら、北上していたのです。このようにして、ピリポは、福音を伝える人、伝道者となりました。

カイサリアは、ローマのユダヤ属州の首都です。彼はそこに定住し、娘も生まれます。ここで、ペテロが後に来て、コルネリウスの家族を信仰に導きます。そしてさらにずっと後に、回心したパウロがアジアやギリシアでの宣教の旅を三度行った後にエルサレムに向かう時に、カイサリアでピリポに会っています。21 章 8-9 節です、「21:8 翌日そこを出発して、カイサリアに着くと、あの七人の一人である伝道者ピリポの家に行き、そこに滞在した。この人には、預言をする未婚の娘が四人いた。」ピリポが、「あの七人の一人である伝道者ピリポ」と呼ばれています。イエスの福音を伝える者として、召命を受け、賜物を受けていました。

私たちは、伝道者としての召命や賜物は受けていないのかもしれませんが。けれども、キリストの弟子であれば、素直に、福音を宣べ伝えるように召されています。復活された私たちの主は言われました、「マルコ 16:15 全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」福音を伝えましょう。そのために、御霊に導かれて、信仰に満たされましょう。聖書のどこからでも、イエスを語ることができるようにしましょう。信じてバプテスマを受ける単純な行動を促しましょう。